

3年ぶりの対面学祭から

先週末、私の勤務校である静岡文化芸術大で大学祭が開催された。二〇二〇年度は中止、二一年度はオンラインのみ。三年生以下には初めての「リアル」な学祭であった。「学祭って、大学生を感じますね」。ある学生が笑顔で話してくれた。

学祭を運営した職員や学生によれば、何もかもが「初めて」であったという。四年生も、前回の対面学祭時は一年生、まだ「見学者」での参加だった。だから今回の学祭準備は、一年生も四年生も条件はほぼ同じ。二年間の開催中止で、学祭の運営を知る者がいなくなってしまうのだ。文化の継承は、かくも失われやすいものと感じる。

さて先日、一冊の新村に目があった。マルクス研究の最高峰と呼ばれるドイツチャイ記念賞を日本人で初受賞した齋藤幸平氏のエッセー集「ぼくはワーバーで挫折し、山でシカと闘い、水俣で泣いた」である。

この中で、京都大学の「タテカン」が取り上げられている。学生が多様な表現をする看板タテカンは、京大の名物的な存在だった。しかし一八年、京都市屋外広告物条例に基づいた行政指導をもとに、設置禁止となり撤去されてしまう。京大職員組合は訴訟を提起し、現在係争中である。

エッセーでは、京大の日常的な文化だったタテカンなのに、多くの人が関心を失っていることと嘆く学生を紹介している。さらにこのままだと、「新入生達は規制する側ではなく、作る側に対して疑問を持つようになるのかもしれない」と齋藤氏は推察する。一度消えてしまった文化への忘却が早いだけではない。その文化は古いもの、無駄なものとして否定されてしまう。齋藤氏の危惧は突飛なものではない。

だから対面の学祭が復活してよかったと思う。コロナ禍の中、多くの学生には、オンラインでの講義だけが大学を感じるものであっただろう。だが先の学生コメントのように、学祭で感じられる「大学」の姿もある。学祭が無駄とされず継承されていくことは、教育や研究にとどまらない、大学の多彩な魅力に触れることにつながる。

(静岡文化芸術大教授)